あいのその　2023年12月号

「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」

（エフェソの信徒への手紙　5章2節）

愛の園保育園　042-325-1045

聖書には「香り」に関する記述が数多く出てきます。「香り」とか「香を焚く」などというと、「線香」や「焼香」「香典」のように、日本においてはどちらかというと仏教のイメージが強いかもしれませんが、世界中の様々な宗教・宗派においてもこれは多用されており、キリスト教においても特にカトリック教会や正教会などでは、礼拝や礼典の際に伝統的に用いられています。また、英国のイングランド国教会では、戴冠式の際には香油（聖油）が用いられ、祝福されます。

現代社会において「アロマテラピー」というものがありますが、香りや匂いというものが人間の心や身体にもたらす効能・効果は、古代のユダヤ社会においても考えられ、生活面・宗教的側面のいずれにおいても重要なものとされてきました。祭壇に香を焚いたり、香油を化粧品や薬品、また装飾品として塗布したりというかたちで利用されていたことが、旧・新約聖書のいろいろな場面で見られます。

イエス・キリストが生まれたときに東方の国から占星術の学者たちが訪れ、贈り物を献げましたが、その中のひとつ「乳香」もまた、焚いて香としたり、鎮痛・止血剤として用いたりするものであり、それがイエスに献上されたのは、“神に香りを献げる”というユダヤの伝統に基づくものでした。これは、いけにえの動物を燃やし、そこから出る香りによって、人間に対する神の怒りを宥めるという意味を持つ行為でした。

しかし、その伝統が根底から覆ることが起こります。それは、本来、人間からいえにえを献げられる側の立場である神の方が、その御子イエスを犠牲として人間に献げるということが起こったからです。神が、罪深い人間への怒りを静めるためにおこなったことは、その人間への裁きや犠牲の要求ではなく、神の子ひとりにすべての人間の罪を背負わせ、十字架につけるということだったのです。それが神の愛です。そして、そのことによって、もはやそれまでの、動物のいけにえによる儀式は必要のないものとなり、人間に対する神の赦しと救いの道が開かれたのです。

「香り」というものは、確かにそこにあっても、目で確認することはできません。同じように、神さまも私たちの目には見えない方ですが、しかし確かに、私たちのいるところに、いついかなるときも共にいてくださる方です。見えない神さまの愛に守られて、私たちもまた愛をもって、他者と共に生きるのです。

（牧師　西脇　正之）